平 成 ２ ４ 年 度
広島市教育センター

児童が意欲的に課題に取り組み自己の変容を実感できる授業の工夫に関する研究

－第１学年算数科「ずをつかってかんがえよう」を通して－

広島市立庚午小学校教諭　　大　上　綾　香

研究の要約

本研究は，第１学年算数科「ずをつかってかんがえよう」の実践授業を通し，児童が意欲的に課題に取り組み，自己の変容を実感できる授業の工夫について探ることを目的としたものである。「児童の学習状況の見取り」，「児童のよさを生かす」，「教師の共感的な姿勢」を授業を構成していく際の重要な柱とした。

その結果，見取った児童の実態を生かし，教材提示の工夫と，授業の工夫を行うことが，児童が意欲的に課題に取り組み，自己の変容を実感するために有効だということが分かった。そして，振り返りカードや授業ＶＴＲなど，客観的な手立てを使うことで，児童のつまずきと不安な気持ちに気付き，寄り添うことができた。

これから，児童の内面に寄り添い，思いやつまずきに気付くための意識と見取りの手立てを，さらに増やしていく必要があり，他の教科や学年において，どのように汎用させていくかが課題である。

キーワード：**学習意欲，自己の変容，学習状況の見取り，児童のよさを生かす，教師の共感的な姿勢**

Ⅰ　問題の所在

生徒指導提要では，日々の教育活動において①児童生徒に自己存在感を与えること，②共感的な人間関係を育成すること，③自己決定の場を与え自己の可能性の開発を援助することの三つの視点に留意することが求められている。そして，教科において生徒指導を充実させるために，「授業の場で児童生徒に居場所をつくること」，「わかる授業を行い，主体的な学習態度を養うこと」，「共に学び合うことの意義と大切さを実感させること」，「言語活動を充実させ、言語力を育てること」，「学ぶことの意義を理解させ，家庭での学習習慣を確立させること」などの五つの観点から，教員が指導力を一層発揮することが求められている。

さらに，「個々の児童生徒についての正しい理解」「一人一人の児童生徒のよさや興味関心を生かした指導」「児童生徒が互いの考えを交流し，互いのよさに学び合う場を工夫した指導」「一人一人の児童生徒が主体的に学ぶことができるよう課題の設定」「学び方について自ら選択する場を工夫した指導」などが，指導上配慮すべきこととして，述べられている。[1)]

これらの視点から自身のこれまでの実践を振り返ると，児童が「わかった」「できた」と実感でき，主体的に課題に取り組む授業を目指してきたが，児童の学習に対する関心・意欲を十分に引き出してきたとは言えない。その原因は，学習内容を理解させたり技能を定着させたりすることに重点を置いていたため，教師主導の指導になりがちであったことが挙げられる。そのため，しっかりと児童の状況を見取って学習指導に生かしていくという視点や，児童の多様な考えを引き出し，そのよさや考えを共有していくために児童の考えをつないで生かしていくという視点が十分ではなかったと考えられる。

そこで，本研究では，児童が意欲的に課題に取り組み，自己の変容を実感できる授業の工夫について探り，その有効性を検証することとする。

Ⅱ　研究の目的

第１学年算数科「ずをつかってかんがえよう」の実践授業を通し，児童が意欲的に課題に取り組み，自己の変容を実感できる授業の工夫について探る。

Ⅲ　研究の方法

１　研究主題に関する基礎的研究
２　研究仮説の設定
３　実態調査
４　学習指導計画の作成に当たって
５　実践授業
６　実践授業の分析・考察

Ⅳ　研究の内容

１　研究主題に関する基礎的研究

(1) 自己の変容を実感する

広瀬(2005)は，「生徒は，学習を通して自らがよりよく変容したことを自覚できたとき，学ぶ意味を感じる。そのことにより，自分に対する自信を高めたり，学びの方法を見通したりすることもでき，より深い理解に到達できる。」[2)]と述べている。また，堀（2003）は，「自分の知識や考えがどのようなもので，それが学習や授業によりどのように変容したかを自覚するとき，学ぶ意味が実

1)　文部科学省『生徒指導提要』教育図書，2010年

2)　広瀬弘行「神奈川県立総合教育センター長期研修員報告」神奈川県立総合教育センター『生徒が学習による自らの変容を自覚できる指導法の工夫ー学習のふりかえりを大切にした評価を通してー』2005年，17-20頁

感できる。」[3]と述べている。

(2) 授業の中の学習意欲

大場（2006）は，「学習意欲」を構成する要素の観点を，授業の流れの中で変化する子どもたちの姿におき，子どもたちの学習意欲に何が影響するのかを，子どもの意識と子どもに対する働きかけの２側面に分けて図１のようにまとめている。

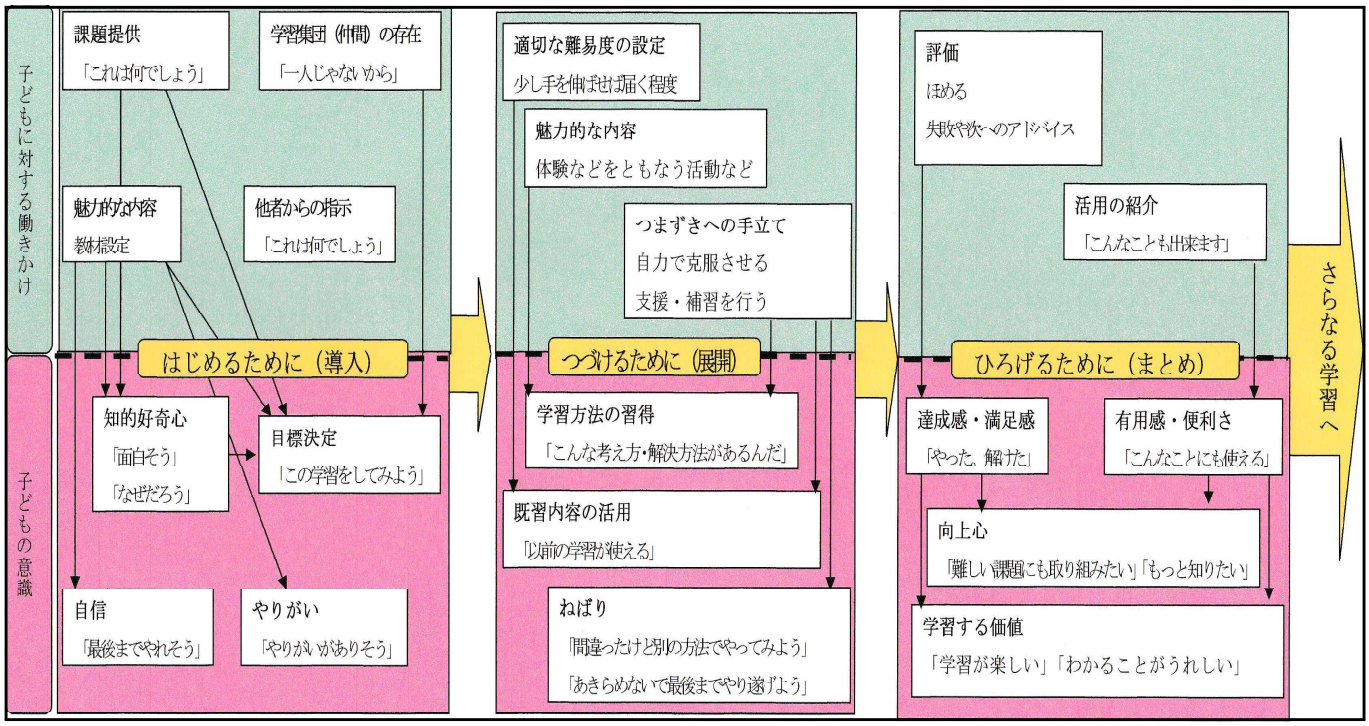

図１　授業の中での学習意欲の要素とつながり[4]（大場，2006）

２　研究仮説の設定

教師が児童の学習状況を見取り，一人一人の児童のよさや興味関心を生かした指導を行うことで，児童が意欲的に課題に取り組み，自己の変容を実感することができるであろう。

３　実態調査

本単元に関わる「順序数と集合数の捉え」「問題場面の構造を図に表す」「演算決定を行い，題意に合った答えを導く」の三点における児童の実態と，学習に対する意欲や取組状況の把握を行った。その結果，次に示すような実態が明らかになった。

(1) 意欲の持続に支援が必要な児童がいること。
(2) 順序数と集合数の違いが明確ではない児童が５名いること。
(3) 演算決定を文章問題中の言葉のみをキーワードにしているため，場面の状況が十分にイメージできていない可能性のある児童がいること。
(4) 自分の考えを説明することに消極的な児童がいること。
(5) 問題場面の構造を理解し，演算決定を行ったり，問題場面を図に表したりすることは概ねの児童ができていること。

---

3)　堀哲夫『学びの意味を育てる理科の教育評価』東洋館出版，2003年，26頁

4)　大場尚博「一人一人の子どもを徹底的に大切にする教育の推進のために」京都市教育委員会京都市総合教育センター『子どもたちが意欲的に取り組む算数・数学教育の在り方Ⅱ－９年間の子ども理解を踏まえた算数的・数学的活動を生かして（図形編）－』2006年，3-6頁

4　学習指導計画の作成に当たって

(1)『児童の学習状況の見取り』と『児童のよさを生かす』指導の工夫

図２は，授業を進める上で，「児童の学習状況の見取り」，「児童のよさを生かす」という大きな二つの柱があり，それを支えるものとして「教師の共感的な姿勢」があるということを表したものである。どの教科でも，授業を進める指針として生かせるように，整理していく中で出てきたのが，この三つのキーワードである。

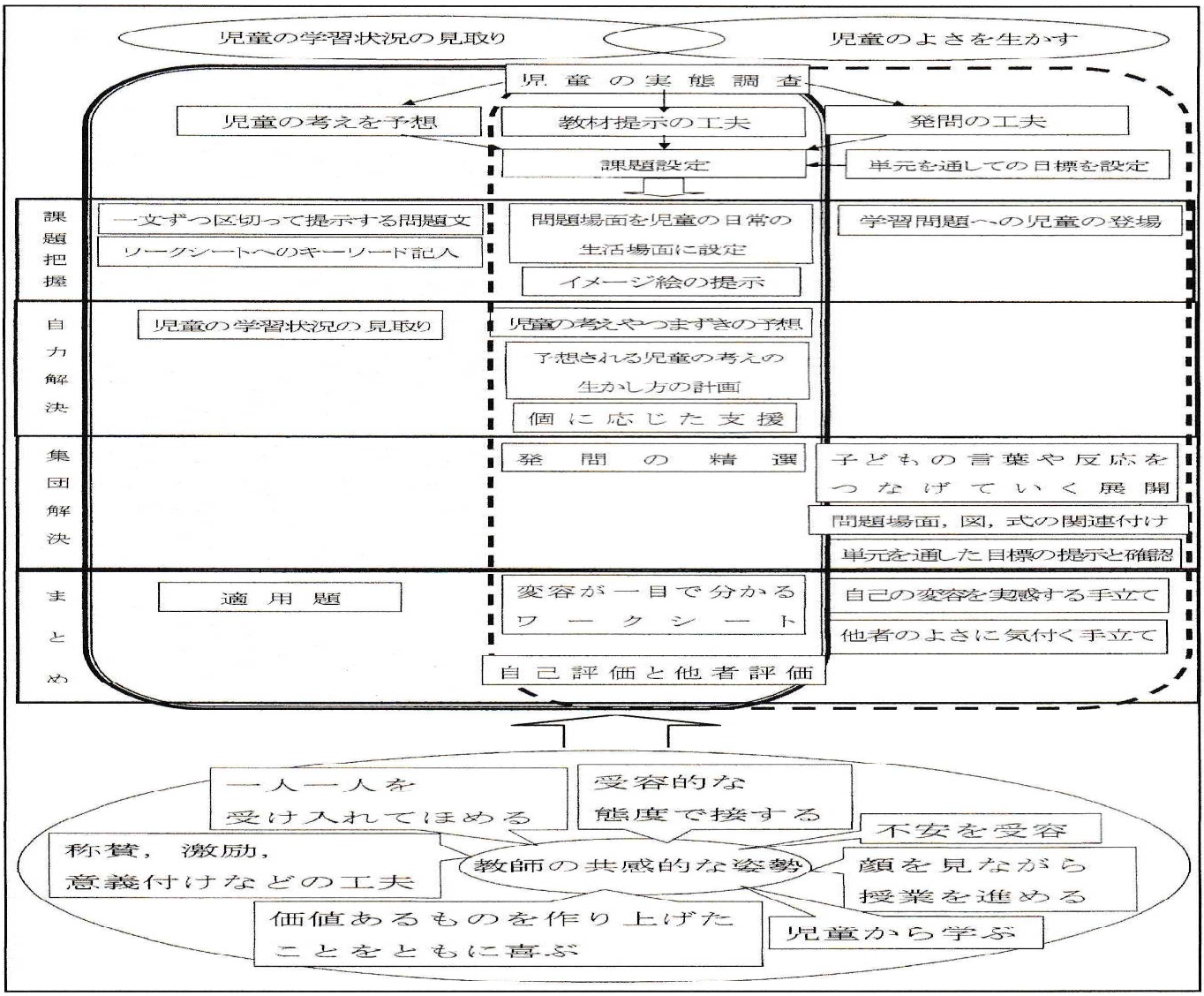

図２　「児童の学習状況の見取り」と「児童のよさを生かす」指導の工夫

(2) 実態調査や適用題の結果を生かした指導の流れや，児童の考えの予想とその生かし方を明記した学習指導案

授業を行うに当たっては，次の２点に留意した。

① 実態調査や適用題の結果を生かした指導

実態調査で明らかになった児童の実態を生かした指導の流れにしている。

② 児童の実態の生かし方を学習指導案に具体的に明記

自力解決の場面で，児童がどのような考えをもつかを予想し，集団解決の場面で，考えのよさをどのように生かし，関連付けていくか学習指導案に明記した。

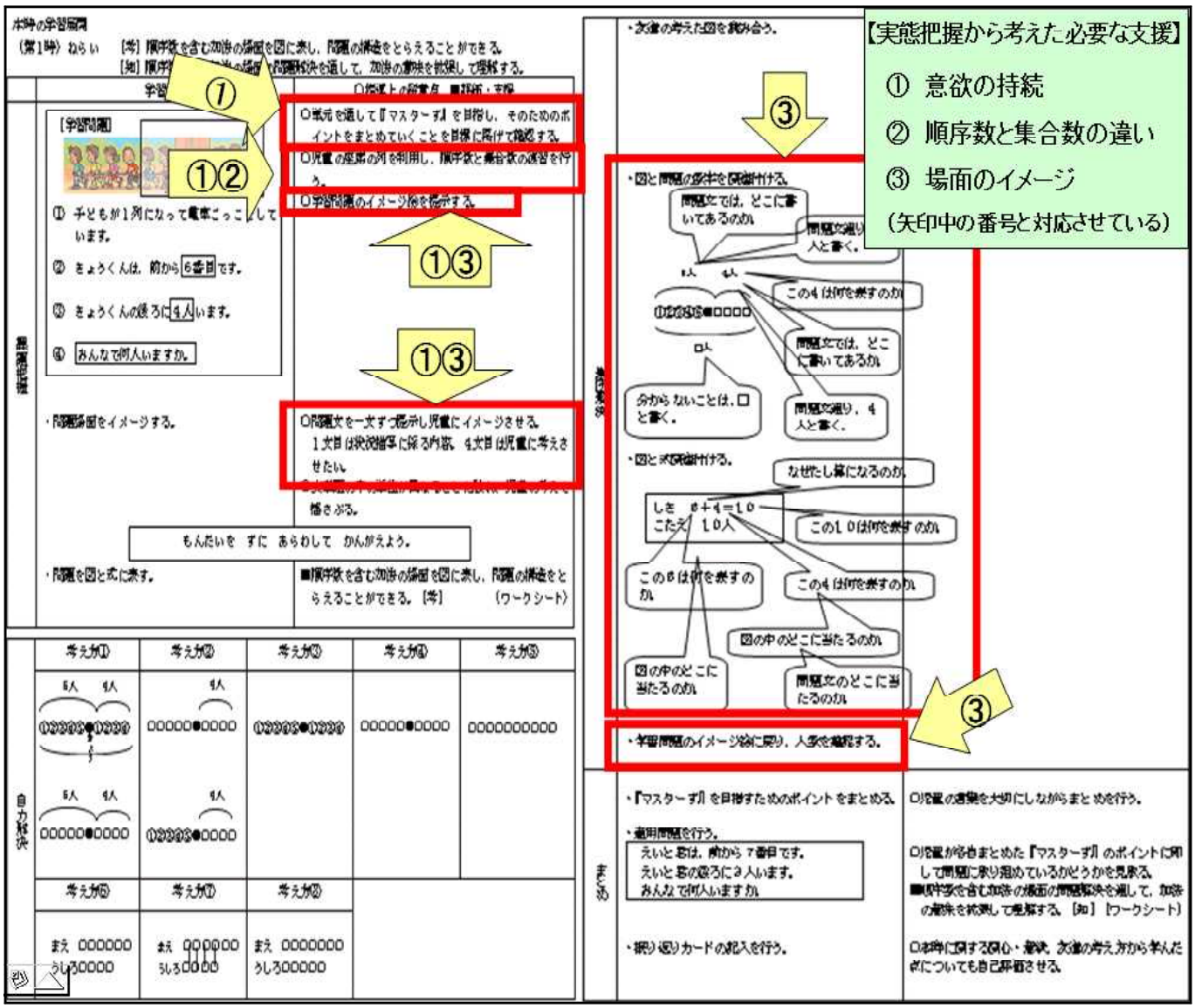

図３　学習指導案（実態把握から考えた必要な支援を明記）

５　実践授業

第１学年２組35名を対象に，実践授業を行った。

授業では，毎時間適用題を行ったり，振り返りカードを使用したりして，児童の学習状況を把握する手立ての一つとした。そして，その把握した実態を学習指導案に明記して授業に臨んだ。

６　実践授業の分析・考察

実践授業の分析に当たっては，次の観点で行った。

(1) 自力解決・適用題の達成状況

図４から，授業が進むにつれて，問題場面を図に表すことができる児童が増えていることが分かった。

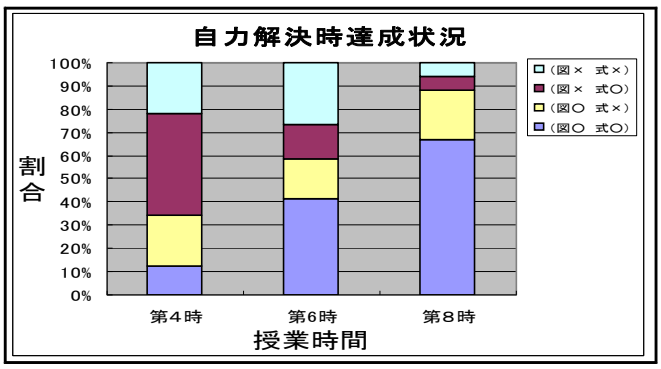

図４　自力解決達成状況

図５から，問題の難易度によりばらつきはあるが，８割以上の児童が，問題の場面を図に表すことができたことが分かった。

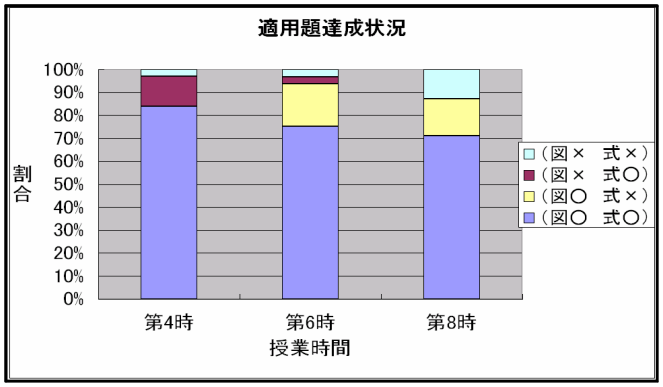

図５　適用題の達成状況

(2) ワークシート及び振り返りカード

表１は，児童の意欲や自己の変容の実感が現れている記述である。

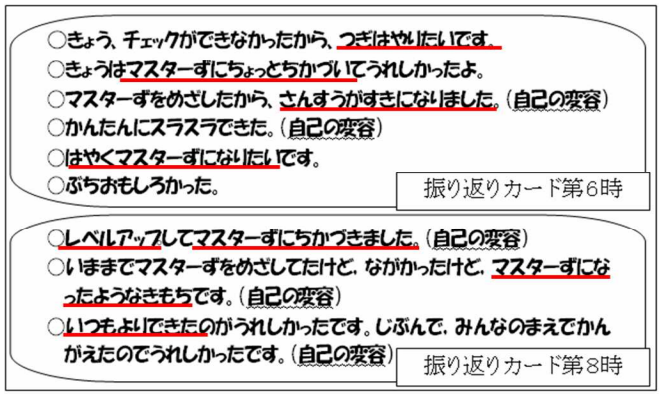

図６　振り返りカード自由記述

このような記述が授業が進むにつれて増えていることが，図７から分かった。

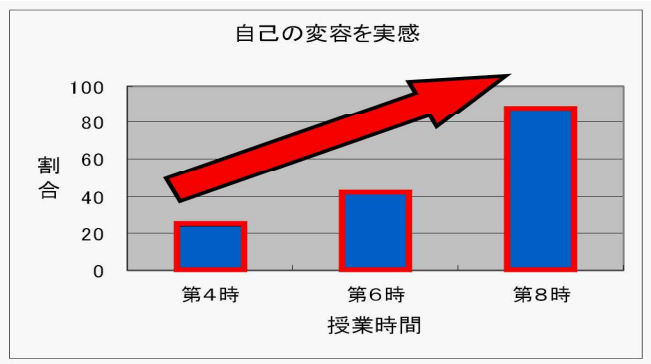

図７　自己の変容を実感している記述の変容

(3) 授業ＶＴＲ

ア　集団解決の場面

集団解決の場面で，児童から多くの式が出された。その後，図８のような児童とのやりとりを通して，考えの多様さとそれぞれのよさを認め合うことができた。

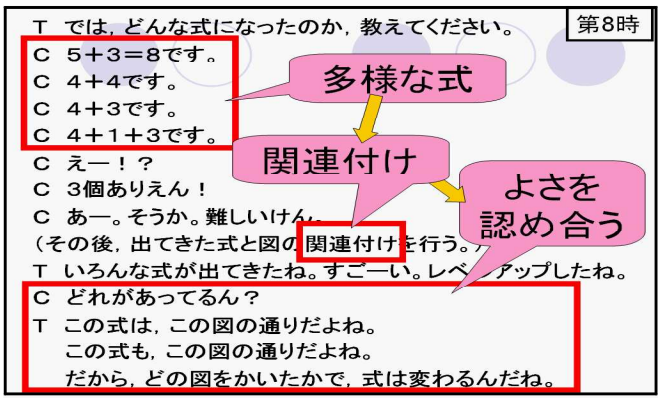

図８　考えの多様さとそれぞれのよさを認め合うことができた場面

イ　抽出児Ａについて

実態調査の結果，Ａ児には，次の２点の支援が必要であると整理した。

① 問題場面のイメージ
② 意欲の持続

第１時には，立ち歩いたり，顔を伏せたりという行動が授業中に見られた。そして，「絶対おれ，おらんと思うよ。」「意味分からん。」「うー・・・。」「図って，何のこと。」などと発言し，課題解決もできなかった。

そうしたＡ児の言動の要因や学習経過を，ＶＴＲにより分析し，Ａ児の言動の中にある思いやつまずきの原因に迫った。そうすることで，Ａ児の発言が，「イメージ絵に登場したい。」「次に何をしていいのか，どこにかいたらよいのか，分からない。」「図に表すということの意味が理解できない。」という，思いの表れであると推測した。

そこで，Ａ児を登場させたイメージ絵や，スモールステップの助走問題などの提示を行ったり，学習のポイントを覚えやすくするために，歌にす

るなどの工夫を行ったりした。第８時では，図９のように学習のポイントを意識して，自力で問題場面を図に表すことができるようになった。その後は，自分の考えを説明しようとしたり，同じ考えであることを伝えたり，友達に発表の仕方をアドバイスしたりと，意欲的な姿が見られた。

その日の振り返りカードには，「ちかづけた。」と記入した。これは，「算数の達人（授業内で『マスターず』と呼称）にちかづけた。」という意味だと考えられる。この言葉や授業中の態度から，今までできなかったことができるようになったという達成感と自己の変容を実感したことが表れていると推測することができる。

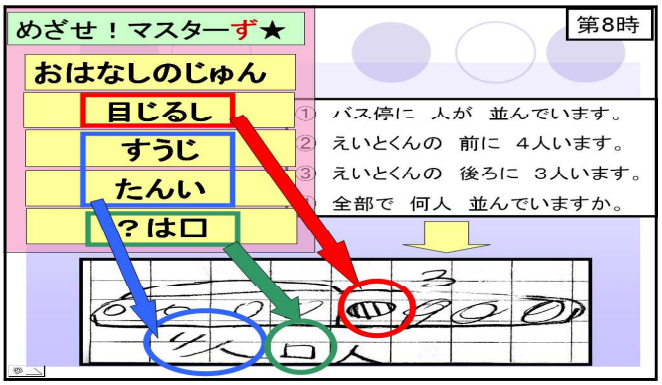

図９　Ａ児の第８時におけるワークシートの状況

Ⅴ　研究のまとめ

１　成果

本研究では，次のような成果を得た。

○　授業の工夫の有効性

教師が「児童の学習状況の見取り」「児童のよさを生かす」「教師の共感的な姿勢」という指導観をもとに，見取った児童の実態を生かし，イメージ絵や，助走問題などの教材提示の工夫と，単元を通した目標の設定，児童を登場させた学習問題，自己の変容を実感するための手だてなどの授業の工夫が，児童が意欲的に課題に取り組み，自己の変容を実感するために有効だということが分かった。

○　児童を生かす視点の重要性

留意すべき視点が，生徒指導提要に挙げられている視点につながっているということが分かった。

○　児童理解の手だて

ワークシートや振り返りカード，授業ＶＴＲなど，客観的な手だてを使うことで，児童のつまずきと不安な気持ちに気付き，寄り添うことができた。

２　課題

○　児童の見取り

今回の研究では，児童の思いに寄り添った見取りを特に心掛けて実践授業を行った。しかし，児童のつまずきと不安な気持ちを見取ることができていたとは言えない例があった。ワークシートや振り返りカード等の客観的な手立てでつまずきに気付くことができた例もあったが，別の手だてがあれば，つまずきをもっと早く，見取ることができていたのではないかと考える。児童の内面に寄り添い，行動の中にある思いやつまずきの原因に気付くための意識と見取りの手だてを，もっと増やしていく必要がある。

○　汎用性

他教科や学年において，どのように汎用させていくか。今回は，第１学年の算数科の１単元で行ったが，今後は，他の教科や学年においても，児童が意欲的に学習に取り組み，自己の変容を実感することができる授業にしていくように，実践を通して，さらに研究を進めていかなければならない。

参考文献

① 岩手県立総合教育センター『生徒指導の機能を生かした授業づくりの手引き　中学校授業が変わる生徒が輝く』2005年

② 文部科学省『小学校学習指導要領解説　算数編』東洋館出版社，2008年